

北海道陶芸の歴史と特徴

北海道大学名誉教授・北海道陶芸会相談役 まえの のりかず 前野 紀一 (2007/11/27)

北海道に、いわゆる和人(日本人)が住み始めたのは15世紀からであるが、大勢の日本人が日本各地から移住し定住するようになったのは、19世紀後半、すなわち江戸時代末期から明治になってからである。それから現在までの約150年の間に北海道には、日本各地の個別の文化が集まり、融合し、進化することによって新しい独特の文化をつくりあげている。

陶芸に関しても同様の歴史が刻まれ、日本各地の陶芸の技術と文化が北海道で新たな技術と文化を生み出している。北海道に最初に築かれた窯は、江戸時代末期に美濃(岐阜)の陶工が函館に開いた箱館窯(1859年)であるが、他にも、常滑(愛知)、加賀(石川)、越後(新潟)、その他の日本各地の陶工たちが北海道の種々の土地にそれぞれの窯を築いた。それらは、いずれも窯業産業としては成功せず長続きしなかったが、寒冷積雪の北海道に適應する新しい陶芸技術文化を生み出し、それらは現在に引き継がれている。

1923年に開設された北海道工業試験場には最初から窯業部門が設置され試験研究や指導に力を入れた。それと同時に、この頃から北海道出身の陶工も出現するようになった。1960年代には、いわゆる高度経済成長期に、やきもの愛好家が増加し、また全国的な民芸ブームに呼応して、陶芸がますます盛んになった。その結果、北海道だけでなく全国の窯元や窯業試験場などで修行を積んだ陶芸作家が多数誕生することになり、現在に至っている。

そのような中で1968年には、北海道内各地で第一線で活躍している陶芸家たちにより「北海道陶芸会(Hokkaido Pottery Society)」が設立された。北海道陶芸会は、当初は陶芸家たちの親睦団体として出発したが、陶芸技術の研究や向上、そして情報交換の場としての役割は大きく、以後の北海道における陶芸界の中心的存在となった。

北海道陶芸の特徴はその多様性と自由な発想にある。北海道外の窯の多くは、江戸時代に藩経済の統制政策下にあったため、技法や発想に関して外部への情報公開が極度に制限され、その土地固有の窯として伝統を維持してきた。それとは逆に、北海道陶芸は、日本各地の種々の陶芸文化が北海道に集結し、そこで融合、進化することによって生まれた。秘密性や閉鎖性よりも、多様で斬新な発想が重要視されている。陶芸家も、古来の窯に弟子入りして修行した人、試験場、研修所、高校、大学等で技術習得した人など、いろいろである。使用する土も、北海道産の土だけにこだわらず、日本各地の土を使い、釉薬もデザインも、自由な発想でつくりあげている。北海道陶芸は、日本各地の伝統的な陶芸文化の基盤の上に創造されつつある新しい陶芸文化ということができる。